

# 翻刻『天仁波綱引』

佐藤 宣 男

本稿は、東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の写本『天仁波綱引』（狩九六三六 一 以下、「天」と略記）を翻刻するものである。

この書は、梅井道敏の『てには綱引綱』（「綱」と略記）の抄録本という趣であつて、奥書等はなく書写の時期も明かでない。巻末に「六郷鼎次郎筆」とあり、この六郷鼎次郎が書写者と思われる。その書写の態度はかなり大まかであり、また独自の工夫も行っている。

特に、取り上げるテニハを目録として掲出する際に、「綱」は上巻、下巻に分け、テニハだけを記す。一方、「天」は一括して巻毎に分けることはせず、ごく一部を除いて、そのテニハの下に簡単な、割注の形での注記を記す。筆者の工夫が顕著に現れている部分である。

本書の記述だけでは分かりにくいところもある。そこは『てには綱引綱』の該当部分を示すことで補うことにしよう。次に示す凡例に従って翻刻を行う。

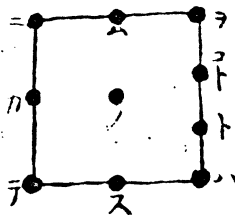
## 〔凡例〕

- 1 本文は改行を行うことが少なく読みにくい。『てには綱引綱』を参考に、話題が変わるところで改行し、読みやすくなるようにする。
- 2 漢字は可能な限り原文に従うことにする。仮名遣いは原文のままとし、必要があれば注記を付す。
- 3 問題となる箇所注記には\*を付し、異文は（\*何かせんー何せんに）のように上に「天」を、下に「網」を記して示す。目録に見える、意味の通じにくいところには、「網」の該当箇所を記す。

4 筆者自身が本文右に傍記することで、訂正を行うことがある。「月やあらん」の形でこれを示す。右に傍記した「あらぬ」が正しい本文である。

5 「見セ消チ」による訂正は、「月も日もの類」の『類』は『事』を見セ消チにして訂正」のように記す。「月も日もの事」の「事」を誤記として「見セ消チ」の印を左につけ、右に「類」を記して訂正しているのである。

## 〔本文〕



此点の四隅を見るに、テニヲハの四字なり。是より和歌にもてにをはと云名は起れり。

ては上を請けて、下を起す也。にてこゝにかしこにて（\*こゝにかしこにて）にてかしこにて（\*こゝにてかしこにて）とて・して・てしは初てしのしの字

んてをはね てぬぬは軽し。つくてへはいへとも云詞。ては休字（\*いへとも云詞

いへと云詞を略したるなり）にこゝにかしこにての字の例にて知し（\*知しー知べし）

かに見るかねは見る斗又見るしにしにの字は既往のし也。故へ北へ行行都（\*行

行ー行）を強く物を断しを・物を・てを・にを（1オ）・とを

は強く物を断る心、又事をかぎりて云字也。重く急也

ては・には 是は、には、大 ぞ 是は強くなして云 (\* なして

あつかひ子細侍らねば證歌略之) とぞ・もて 此扱ひ子 (\*もてーもぞ)

ぞは・ぞも 何ぞはなんぞ 也。は心なし こそ のみ けふのみと云也。の 緩し ても・にも・をも・とも・

さへも・だにも 是等子細なし さへ は大勢だに、同じさへは重く、だ

へに・さへや 子細なし。さへと留 だに には軽し、又も字に通ず也。さへは・さ

休めた かは 疑ふは同じ様也。は だに 疑の字也。かよりは緩し疑

や誰と云は、疑上 (1ウ) ばや 観せばやな とや 重し とや・とか 疑の詞の下なれば、かど云住

なれや・あれや 是は推量の心あり。なれやあれやは さま 各々子 やは 大勢かは よ

(\*いかゞーいかゞと) てや・にや・をや・もや 細なし 各々子 やは 大勢かは よ

はやの字、かの けり 結語の辞也 けん 是、けりけるをはね き はけりに同じ。あ

字に大勢同じ けり 結語の辞也 けん 是、けりけるをはね き はけりに同じ。あ

は心聞こえーなりは平かにすらりととむる辞也) 也けり 是、こといひつめ

也辞 (\*ことーことを) なん なるをなん云も有り (\*なん云ーなんと云) めり

はなりに少疑の たり 是をよりは少 せり 是たり、又た らん 留るは上に疑の心の詞有

少急なるかたなるべし) せり 是たり、又た らん 留るは上に疑の心の詞有

らし らん、大勢同じ。らんは十分 べし 是、かく有べしと治定して云も (2オ) まし 是

しと大勢同じ。べしよりは かし 下知の心有べし ぬる 也。ぬと云はぬるの略也 づる

軽く緩し。又下知の心有 かし 下知の心有べし ぬる 也。ぬと云はぬるの略也 づる

ぬるぬれよりは重く、強く、既往 つゝ 哉 言通所には、いひ盡して、 (\*言ー言

の心有。つといふも、づるの略也) 語) (2ウ)

ては上を承て下を起す字也。

浅みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

この里に旅ねしぬべしさくら花ちりのまがひに家路わすれて

あふさかのせきの清水に影見へて今やひくらん望月の駒

あたらしきと、や我身をとめくらん(3オ)ひま行駒にみちをまかせて (\*と、やーとしや)

右二首ともに上句へかへるなり。(\*「右二首」は「この里に」「あたらしき」の二首)

(にて \*「網」見出しとして掲出)

都にてめづらしと見るはつゆきはよしの山にふりやしぬらん 常夏の花をわすれて秋風をまつ影にてけふもくれぬる

にてはここにて、かしこにてなどいふ心也。又かくある事にて、さあ

る事にての心也。(3ウ) おしからぬ命や更にのびぬらんをはりのけぶりしむる野べにて

上へ帰る也。も、は、に、を、の、さへ、此か、へ字にてとまるべし

と云。 枕とて草引むすぶこともせじ秋のよとだにたのまれなくに

さくら花ちらば散なんちらずとて(4オ)故郷人のきても見なくに

枕とては枕ぞとて也。ちらずとてはちらずとてもの心なり。 夕ぐれは雲のはたてに物を思ふうはの空なる人をこふとて

上へ帰る也。 やどりして春の山べにねたる夜は(4ウ)夢のうちにもはなぞちり

ける 「網」にはこの二首についての説明あり) 春の夜の夢のうきはしとだへして峯にわかる、横雲のそら

を証歌として挙げる。「天」はこの証歌を脱漏) 是は嵐の音ばかりしてあふ人もなしとかへる也。

よしさらば散るまでは見じ山桜花の盛をおもかげにして

此よしさらばの心有。花を人々なしみて(5オ)もく、時ありてち

るもの也。かくのごとくなれば、おしみてあへなし。さうあらば散ま

ではみるまじきなり。とても散花なれば、此花の盛を面影にしてと云心

也。此哥言外の意味あるなり。（\*心有。一心は、\*なしみても―おしみても）

月やあらん春やむかしの春ならぬ我身ひとつは元の身にして  
是も云捨て余情かぎりなき歌也。（5ウ）  
てし

よしの川岩浪高く行水のはやくも人を思ひそめてし（\*原文「して」を「し」に漢数字「二」、「て」に漢数字「一」を付して、訂正）  
初てしの字は既往のし、故にての字至て軽し。おもひ初しの心也。

（\*初てしの字は―初てしのしの字は）  
思ふどち春の山べに打むれてそこともいはぬ旅ねしてしか（\*「どち」は「どし」の「し」を「見セ消チ」にして訂正。「して」の傍線は「てし」に付けるべきもの）

このてしの字は休め字也。旅ねして哉と（6オ）云心也。（\*てしの字は―てしのしは）  
てん

別れをば山のさくらにまかせてんとめんとめじは花のまに／＼  
あづき弓をして春雨けふふりぬあすさへふらば若菜つみてん  
此てんはてをはねたる也。まかせて、つみてといへば見在の心あり。  
てんは将来の心あり。（6ウ）  
てぬ

かくながらちらで世をやはつくしてぬ花の常磐も有るとみるべく  
てぬのぬはつくしてよなど云心也。歌の心はかく盛ながらちらで世を  
つくしてよ、はなの常盤なるもありと見侍べきぞと云なり。

てへ（7オ）  
今さらにとふべき人も面ほへず八重葎して門させりてへ（\*「面ほへず」は「面ほへて（思ほえて）」の「て」を「見セ消チ」にして訂正）

てへはいへと言詞を略して也。まてと言はゞをまてはゞとよめり。又

てへはて也。へは休め字也と云。（\*略して也―略したるなり \*まてはゞ―まててはゞ 「休め字」は「て也字」の「て也」を「見セ消チ」にして訂正）

むかしより名高き宿の言葉は木のもとごとにおちつもりてへ  
此てへは同じ事。考へ合べし。（7ウ）（\*合べし―合すべし）  
に

にはこゝに、かしこに、とある事に、かくある事といふ心。  
恋しきにわびてたましるまどひなばむなしきかくの名にや残らん  
（\*かくの―からの）

八重葎茂れる宿のさびしきに人こそみへね秋はきにけり  
右恋しきのにの字は重く急也。さびし（8オ）きにのの字に軽く  
緩らにして、しかも味あり。（\*緩らに―緩かに）  
逢ふまでのかたみも今は何かせんに見ても心のなぐさめなくに

（\*何か―何）  
何かせんのの字は心なし。何かせんとばかりの心。（\*何かせん―何かせんに）  
春雨の夜にふりにたる心にもなをあたらしく花をこそおもへ（\*夜に―よに）

ふりにたるのの字、千字又こゝろなし。ふり（8ウ）たるの心。（\*ふりにたるのの字、千字又こゝろなし―ふりにたるのの字、又心なし）

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしま  
に  
此は上へ帰る。

さくら花色はひとしき枝なればかたみに見れば慰まなくに  
此心は形見とおもひてみれば、なぐさめなくにといひ捨て余情あり。  
（9オ）

がに

まきもくのあなしの山のやま人とひとみるがに山かつらせよ  
見るがねとは見る斗のと言詞也。又人もみるがねとは見るべくなど言  
詞なり。（\*見る斗のと一見るばかりと）

桜花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まがふがに

是は道まがふがにちりかひくもれと帰へして（9ウ）聞べし。此がに  
の詞を賀に詠ずる、其興あるよし、自然の事也。（\*よしよし顯注密  
勘にみえたり）  
にし

おくと見し露もありけりはかなくて消にし人を何にたとへむ

此にしこのゝ字は既往のし也。故に至て軽し。（\*にしこのゝにし  
のしの）

又もこん時ぞとおもへど頼まれん我身にしあればおしき春哉（\*頼  
まれん一頼まれぬ）（10オ）

此にし字は休字也。我身にあればの心乍し字を入れて優に聞ゆ也。

（\*にし字は一にししは）  
へ

北へ行雁ぞなくなるつれて越しかずはたらでぞかへるべらなる

（\*越し一来し）

「べらなる」の「へ」の傍線は誤記。正しくは「北へ」の「へ」  
に付すべきもの）

便あらばいかで都へ告やらむけふしら河の関はこへぬと（「しら河」

は「しる河」の「る」を見せ消子にして訂正）

北へ行、都へ告やらむ、へはに同じ。ねやへも入らぬ（10ウ）など云  
はよし。（\*へはに一へはにの字に \*ねやへも入らぬ一子細なしとい  
へども、事によりて俗にちかく聞ゆるを嫌ふべし。但ねやへもいらぬな  
どよめる有。あしからず聞ゆるにや）  
を

は強く物を断字にて重し。又緩やか成るもあり。「成る」は「成る

に」の「に」を見せ消子にして訂正）

花の香を風のたよりにたぐへてぞうぐひすきそふしるべにはやる  
萩の葉にふけば嵐の秋なるを待ける夜半のさほしかの聲（11オ）  
是等を以弁べし。

なべて世のおしきにそへて惜哉秋より後の秋の盛を

是は上へ帰る。

物おもはでたゞ大かたの露にだにぬるればぬるゝ秋の袂を

いひすてゝ余情あり。

しを（11ウ）

おもひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらましを  
なぐるさきみつの小嶋の人ならば都のつとにいざといはましを

（\*なぐるさき一おぐるさき）

結句の末に有は共にいひ残すて也。（\*て也一てには也）

物を

ちると見てあるべき物を梅花うたて匂ひの袖にとまれる（12オ）

楸生るかた山かげにしのびつゝ吹ける物を秋の初かぜ

右の二首強く断て讀り。尤重く急也。

立とまり見てをわたらん紅葉ばゝ雨とふりても水はまさらじ

恋しくばしたにを思へむらさきのねずりの衣色にいづなゆめ

てを、にを、とをの字何れも休字也。（12ウ）見てわたらむ、下に

おもへ、心としれの心。

は

はは強く物を断る心有。亦事を限りて言字。

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

もみぢせぬ常盤の山に住しかはをのれ鳴てや秋をしるらん

右二首は、山里のは、すむ鹿のは、強限りて云。（\*山里一山里は）

（13オ）

秋は来ぬもみぢは宿にちりしきぬみちふみわけてとふ人はなし

此哥の三つのはの字は悉く断心有て重き。

春秋におもひみだれてわかかねつ時につけつゝうつる心は上へ帰る。

をろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへず瀧つせなれば(13ウ) いひすてゝ余情あり。

吹風を鳴てうらみようぐひすはわが家は花に手だにふれたる(わが家は―我やは)

鶯は吹風を鳴て恨よの心、かへしてきくべし。さて我やは花に手だにふれたる、手はふれずと云。

いつはとは時はわかかねど秋の夜ぞ物おもふことのかぎりなりける(14オ)

此初五のいつはとはの字は心なし。いつとはの心なり。(※いつはとはの字―いつはとはの字)

ては・には はの字同じ。(※はの字同じ―はの一字の讀方に大体同じ)

ぞ

ぞは強くおして言字、治定の心有。フムユルツにておさゆべし。鶯ぞ鳴く、涙ぞ袖に玉はなす、袖ぞかはかぬ、ものぞおもふ、人ぞたのむ、花ぞちる、如此おさゆる事常の事也。(※人ぞ―人をぞ)(14ウ)

ぞは強くをす字也。故におさへ字も治定の字ならでは義理不叶はざる也。

大かたは月をもめでじこれぞ此つもれば人の老と成もの今こんといはぬばかりぞ郭公あり明の月のむら雨の空

此こにてしるべし。ぞと大体同じ。然れ共はの字は強く物をかぎり、ぞの字は強く(15オ)ものをおしていふ心あり。右とりて聊意味たがふ。

(※此こ―此ら \*ぞと―はとぞと \*右とりて―よりてあつかひ) やぞ

年にありて一夜味あふ彦星もわれに増りて思ふらんやぞ(※味―妹

に)

おもふらむといふ心にて、ぞは心なし。(※おもふらむと―おもふらむやと)

山賤の垣ねに咲る卵のはなはたが白妙の衣かけしぞ(15ウ) たが白妙の衣かけしぞと問かへる心。すべて上に疑の辞あるは問かへる心有べし。いかにねて明るあしたに云事ぞ、是等にて知べし。(※問かへる心―問かくる心 \*問かへる心―問かくる心)

いで我を人なとがめそ大船のゆたのためたに思ふ比ぞ(※思ふ―物思ふ)

我恋は行衛もしらずはてもなし逢をかぎりとおもふばかりぞ上にうたがひなし。いひすてたるなり。(16オ)

ぞは・ぞも 命やは何ぞは露のあだものをあふにしかへる惜からなくに(※かへる―かへば)

色よりも香こそあはれとおもゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも(※おもゆれ―おもほゆれ)

何ぞははなんぞ也。は心なし。梅ぞもは梅ぞといへる也。誰袖と疑の字有故に問かくる心。ぞもも字心なし。下知のぞ、たちなかく(16ウ)しそ。母を日本記になともそとも讀り。やまへかへるなどのなも下知也。(※ぞもも字―ぞものもの字)

こそ

こそはぞと大体同じ。ぞは急にしてこそは緩し。故にぞといへばけるとおさへ、こそといへばれれとおさゆる哥多し。けるは急にして、ければ緩し。こそはエケセテネヘメエにておさゆべしと云。有とこそ聞け、命をこそまで(17オ)、いこそねらぬね、ものおこそ思へ、かくこそはみめ、月をこそみれ、如斯をさゆる事常の事也。こそはぞの字よりは緩し。故にきけ、おもへ、見めなどおさへの詞も緩し。自然相應する。(※命をこそまで―君をこそまで \*ねらぬね―ねられね)

こそ

こそはぞと大体同じ。ぞは急にしてこそは緩し。故にぞといへばけるとおさへ、こそといへばれれとおさゆる哥多し。けるは急にして、ければ緩し。こそはエケセテネヘメエにておさゆべしと云。有とこそ聞け、命をこそまで(17オ)、いこそねらぬね、ものおこそ思へ、かくこそはみめ、月をこそみれ、如斯をさゆる事常の事也。こそはぞの字よりは緩し。故にきけ、おもへ、見めなどおさへの詞も緩し。自然相應する。(※命をこそまで―君をこそまで \*ねらぬね―ねられね)

こそ

こそはぞと大体同じ。ぞは急にしてこそは緩し。故にぞといへばけるとおさへ、こそといへばれれとおさゆる哥多し。けるは急にして、ければ緩し。こそはエケセテネヘメエにておさゆべしと云。有とこそ聞け、命をこそまで(17オ)、いこそねらぬね、ものおこそ思へ、かくこそはみめ、月をこそみれ、如斯をさゆる事常の事也。こそはぞの字よりは緩し。故にきけ、おもへ、見めなどおさへの詞も緩し。自然相應する。(※命をこそまで―君をこそまで \*ねらぬね―ねられね)

こそ

かれはてゝ後は何せん浅ぢふに秋こそ人を松虫のこへ  
ケ様の体多し。こそといふは物をさし(17ウ)あてとめなどする様に  
心得べし。さすれば自然と叶。(＊とめ―とがめ)

つこの国のおもはず山城のとはに逢みんことをのみこそ  
事をのみとまでにて、理はよく聞ゆるを、こそとをしていひはてたる  
に言外の意味有り。

と(18オ)

とは唯詞をつぎて、けふのみと、花みんなど也。との軽し。又與の  
字に叶もあり、君とわれ、夏と秋と。又との字にぐるは雖の字に叶有。  
春たてど、見れどあかぬ類也。(＊詞をつぎて―詞につきて ＊など也。  
との軽し―などやうにいへるとの字至て軽し ＊「雖の字に」は「雖の  
字也」の「也」を見せ消すにして訂正 ＊見れどあかぬ―見れどあかぬ  
の)

行水と過るよはひと散花といづれまててふことをきくらん

水と齡と花とかぞへて云。(18ウ)

いかにねて明るあしたにいふことを昨日を去年とけふをことしと  
詞につきていへる。

たのめずば人をまつちの山也とねなましものをいぎよひの月

右の歌は前の二首に異也。是は山なりとももの心。

の(19オ)

のゝ字は種々のてにはに通ぜり。至て緩し。故にあまり多くば、のび  
過てあしゝ。ななし千字四ツ有は折ふし有ども、のゝ字四ツあるはこと  
にきこへず。五つあるを哥合に難ぜられたる事あり。然れども一首の躰  
によるべし。(＊あしゝ―聞ゆ成べし ＊ななし千字四ツ有は折ふし有  
ども―おなじ文字四つありなどふるくとがめたる折しもあれど)

冬枯の森の木の間の霜の上に落たる月の影のさやけき(＊さやけき

―さやけき)(19ウ)

のゝ字七ツ有ども耳にたゝず。に、は、を等の強き、耳に立をのゝ字

にかへてつかふべし。哥がらのびてよし。

あふと見て理のかひはなれどもはかなき夢ぞ命なりける(＊理

―現)

大ていは理にとよまんに、のゝ字面白し。(＊理にとよまんに、のゝ  
字面白し―人はうつゝにとぞよまんのゝ字油瑩の上にはなあぶらひく  
所也。深感之。同艸子に)

浅ぢふの秋の夕ぐれ鳴むしはわがごとしたに物や悲しき(20オ)

我等は浅ぢふにといはんに、のゝ字面白し。

ひとりして物をおもへば秋の田のいなばのそよといふ人のなき

東路のさのゝ舟橋かけてのみおもひはたるをしる人のなき(＊はた  
る―わたる)

いふ人のなき、しる人のなき、のゝぞに同じ。詞によりてかふべき也。

たとへば、月ぞ残れる、月の残れるといへば同じ事ながらよし(20ウ)。

亦只有明月ぞ残れるは唯の字重き故、月ぞとつよくおして讀り。是等は  
句の勢によるべし。又上に疑の字あれば、ぞをのにかへて讀なり。(＊

のゝぞに―のゝ字ぞと)

折つれば袖こそ匂へむめの花ありとやこゝに鶯のなく

ありとやと疑の字有故に鶯の鳴と云。ぞはして治定する字なれば、

上の疑(21オ)の心に應ぜず。鶯の鳴にて、疑の意を残せり。

明てみぬ誰が玉章のいたづらにまだ夜をこめて帰る雁がね

たが玉章ぞなど書有り。此哥、のゝ字故よくきこへる。(＊たが玉章

ぞなど書有り―此第二句、たが玉章か、たが玉章ぞなどある本あり。し

かれども、のゝ字に書る本よしとぞ)

君やこむ我やゆかんのいさよひに横の板戸もさゝずてにけり(＊て

にけり―ねにけり)

塩釜の浦の煙はたへにけり(21ウ)月見ぬとてのあまのしわざに(＊

見ぬ―見む)

右の二首ののゝ字有故に優にして味有り。

吹まよふ野笹を寒み秋はぎのかつもり行る人の心の (\*野笹を

―野かぜを \*かつもり行る―うつりも行か)

昔思ふね覚の空に過にけん行衛もしらぬ月の光りの

も (22才)

もは兼たる字、緩にして然も味多し。かねたるとは花も紅葉も、月も

日もの類也。又もの字ふたつなくともかねたる心有るべし。これもとい

へばかれに通じ、我もといへば人にも通じ、凡身をいひて他をしらし、

爰をいひて彼所を断る也。一首意得すべし。(月も日もの類)の「類」

は「事」を見せ消子にして訂正 \*なくとも―ならねど \*かれに通じ

―かれにも通じ \*人にも通じ―人も心の心を兼べし \*凡身―凡自

\*一首意得すべし―一首の体によりて軽重有べし)

さくら花咲にけらしも足引の (22ウ) 山のかひよりみゆる白雲

此もの字深き味あり。

しら波の跡なきかたに行舟も風の便りのしるべ也けり (\*也けり

―也ける)

右の行衛もの字にて恋の心あり。( \*行衛もの字―行舟ものもの字)

はも・つも・かも・やも

笹のはに降つむ雪のうれをおもみもとへ立行我さかりはも (\*へ立

行―くだち行 (降ち行く) (23才)

難波がた漕いづる舟のはるぐくとわかれくれどもわかれかねつも

春霞色のちぐさの見へつるはたなびく山の花のかげかも

たねしあれば岩にも松にけり恋せしこひばあはさらめやも (\*松に

けり―松は生ひにけり \*恋せ―恋を)

右四首、はも、つも、かも、やものも字は休字也。( \*やものも字―や

ものもの字)

ても、にも、をも、とも、さへも、だにも、右おのく (23ウ) 子細

なし。

さへはだにに大駄同じ。さへは重く、だには軽し。副をさへと訓ず。

さへはもの字に通ず。故に副の字を書。其儀相叶べき歟。実さへ花さへ

その葉さへとよめるは、実も花も葉もの心。

山櫻ちりなん後の家路さへ (24才) 花に忘れてしなりだにせず (\*

しなり―しおり)

此歌のさへは奇妙なるもの也。一首かゝりたるさへ也。しほりだには

軽し。( \*一首―一首に)

衣だに中にありしはうとかりきあはぬ夜をさへ隔つる哉

だによりさへ重し。

さへは、さへに、さへや、子細なし。

結句の末ある、いひ残したる心有り。( \*結句の末―結句の末に)

谷陰や苔の岩ねに庵閉て (24ウ) うときは嘸なしたしきにさへ

だに

だにはさへと大体同じきも有。又事によりて其様かはり有り。

散をだにすへじとぞ思ふ咲しよりいもと我ぬる床夏の花 (\*散

―塵)

これはさへに通ぜり。

秋とだに忘れんとおもふ月影を (25才) さもあやにくにうつ衣かな

歌の心、月をながめて愁ふる心有に、よしや月故にあらず、心をなや

ますは都而秋のならひぞとおもひかへして、さりば秋とだに忘れんとお

もふに、又衣うつをととして、さもあやにくに哀をそふるぞといへる也。

此だにのあつかひ妙也。( \*さりば―さらば)

深からぬ外山のいほのね覚めだに (25ウ) 嘸な木の間の月はさびし

き

深山の月といふ題也。心は、外山の庵のね覚だに木の間の月はさびし

かるらん、この深山はましてといふ也。ね覚だにといへる、かしこをい

ひて爰の淋しさを云まはしたる。

うき身をば我だにいとふいとへ只そほだに同じ心と思はむ (\*そほ

だに―そをだに) (26才)

我だに重く、そをだには軽し。

思ふとはみゆらむものをおのづからしれかし宵の夢ばかりだに

上へ歸して聞。

か・かは

かは疑と問心有。又かなの心にも通ず。又句の中間に有て詞を休めるも有。又かと一字疑べからず。それかあらぬかといふやうに(26ウ)かさねて讀べし。

秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか波のうつるか(\*うつる

か―よするか)

疑のかの字なり。

白玉か何ぞと人のとひし時露とこたへて消なましものを

一字疑のかの字なれども、何といふ疑の詞にてうけたる故よし。

(27才)

いとはやも鳴ぬる雁か白露の色どる木々も紅葉あへなくに

夕さればをのゝ萩原吹かぜにさびしくもあるか鹿のなくなる

是等は問かくる心あり。又疑の心に通べし。

浅みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

河風のすゞしくも有か打よする(27ウ)波とともにや秋は立ちむ

是等はかなを略したる也。カナノ反カ。は哉よりは軽し。只かとめてなといへる心の哉に通ずべし。(\*は哉よりは―かは哉よりは \*か

ととめて―かととがめて)

恋すてふ我名はまだき立にけり人しれずこそ思ひ初しか

哉の心。上へ歸る。至て軽し。又しをといふ心とぞ。(\*又しをとい

ふ心とぞ―一説しをといふ心也とぞ。又通ずべし)

心がへするものにもが片恋は(28才)苦しきものと人にしらせん

おもふどち春の山邊に打むれてそこともいぬね旅ねしてしが

にもが、てしがは、にもがな、てしがなと願ふ心。

明ぼのゝ河せの浪の高瀬舟くだるか人の袖のあき霧

うつり行雲にあらしの聲す也ちるかまさきのかづらきの山(28ウ)

句の中に有は休めたるかにて、至て軽し。但疑の心ふくめり。

かは

かはゝやはと大体同じといへ共、詞によりてかわる。かはゝやはよりは急なり。

霞かは花うぐひすにとぢられてはるにこもれる宿の曙

けふのみと春を思はぬ時だにも(29才)たつことやすき花の陰かは

霞かはの歌は、霞かは、ならねど、花うぐひすにとぢられての心。霞

のみかは也といへり。又通ずべし。花かげかはと立ことやすき花の陰か

は、立ことやすからぬ花の陰ぞと心をかへして聞。(\*ならねど―霞な

らねど \*霞のみかは也―一説霞のみかは也 \*花かげかはと―花の

かげかはは)

おほ空は恋しき人のかたみかは物思ふことにながめわぶらん(\*わ

ぶらん―らるらん)(29ウ)

いかならむ岩ほの中にすまばかは世のうきことのきこへござらん

かたみかはゝかたみか也。すまばか也。共にはは休字なり。疑のか也。

(\*すまばか也―すまばかはは、すまばか也)

や

やは疑の字、かよりは緩し。かの字は疑の詞の下有。やは疑の詞の上

に有べし。縦は誰かすむといふやふに疑のことばの下なればかと云、又

住や(30才)誰といふは疑の上なればやとをくべし。是千に一ツも違ふ

事有るべし。(\*疑の詞の下―疑の詞の下に \*是千に―しかれ共是が

千に \*有るべし―有べしとぞ)

春やとき花や遅きと聞わかむうぐひすだにも鳴ずも有哉

夜やくらき道やまどへる郭公わがやどおしも過がてになく

ことやはびしなどいふも疑也。花や紅葉、花と紅葉の心也。至軽し。たつや霞、ふるや霰(30ウ)なども同じ。句尾置も有。袖にはかなから



むやの類なり。(＊はびしーわびし ＊たつや霞、ふるや霞なども同じ  
―此類ならねど、たつや霞、ふるや霞なども軽し ＊句尾―句尾に)

秋の露や袂にいたくむすぶらんがき夜あかずやどる月影  
初五のや余情有なり。

大原やをしほの山もけふこそは神代のこともおもひいづらめ

大原やおしほ山、二つの山なる故にやと云。ま(31才)きもくのあなしの山、みよしのよし野など様に立名故にやとは切まじき也。(＊大原やおしほ山、二つの山なる故にやと云。まきもくのあなしの山、みよしのよし野など様に立名故にやとは切まじき也―私云、右大原やをしほも二つを取り合ていふ故にやと切たり。まきもくのあなし、みよし野よし野などつゞくるはやとは切まじき也)  
はや

見せばやなをしまの海士の袖だにもぬれにぞぬれし色はかわらじ  
かくせばやさうせばやと願心有。人に問はゞやなど同じ。又おもひつゝぬればや人の見へざらんはぬればにやと也。願心にあらず。(＊見へざらん―見えつらん ＊ぬればにやと也―ぬればにや也)(31ウ)  
こゝろあてにおらばやをらんのや軽し。おらばおらむの心。おらばおらんやの心云。又かくるゝまでにかへり見しはや、此やはやと書、かへりみしもの也といふ心。ねての朝氣の雪のふりはも、同じ。(＊おらばおらんやの心云―一説おらばおらんやの心と云。＊此やはやと書、かへりみしもの也といふ心―諸注に此はやは者也と書。かへりみし者也といふ心と云。此義非也。唯、かへりみし、かゞりさすの心也。＊雪のふりはも―霜のふりはもなどいひすてたるに)  
とや

春霞たな引山のさくら花うつろはんとや色かはり行(32才)

難波がたみじかき芦ふしの間もあわで此世をすぐしてよとや(＊芦

―芦の)

末にとやと留るは重し。なつる紅葉の枝を見よとかなどいふに同じ。

すべてとや、とかはとがめて云也。(＊なつる―おつる)  
なれや・あれや

おぼつかなるまの嶋の人なれや我ことのはをしらずがほなる  
(32ウ)

百敷の大宮人はいとまあれや桜かぎしてけふもくらしつ

右は推量の心、なれやはなるか、あれやは有か。

冬河のうへは氷れる我なれや下にかこひて恋わたらん(＊かこひて―かよひて)

上は氷る我なるかと身怪み思ふなり。我なれやは自あやしみ、故に疑の心在。人なれやは他をさしていふ故推量の心あり。(＊身怪み思ふなり。―自あやしみ思ふなり。推量の心にあらず。)(33才)

有明の月だにあれやほとゞぎすたゞ一こゑの行かたもみむ

月だにあれといふ。

きや

関こゆる人にとはゞやみちのくのあだちのまゆみ紅葉しにきや

もみじしにきや如何と心をのこせり。思ひきやはおもはざりしといふ心。(33ウ)(＊思ひきやはおもはざりしといふ心―思ひきやなどいふは、おもひけりや、おもはざりしといふ心なり)

めや

移しうへば秋なき時やさかざらん花よりちらめ根さへかれめや

(＊花より―花こそ)

めやは心、花はちらめ、根さへ枯れめやは、根はかれまじきぞと云心。やの字にて心帰る。(＊めやは心―めやといふはめやはの心也 ＊花はちらめ、根さへ枯れめやは、根はかれまじきぞと云心―花こそちらめは

花はちららめ也、根さへかれめやは根はかれまじきぞといふ心也)

思ひ河たへず流るゝ水のうたかた人にあはで消めや (＊水のの

―水の泡の)

あはで消めや消えかてあふずる心。(＊あはで消めや消えかてあふず

る心―これはあはで消めや消るであらふずるの心なり（34才）

ましや

けふこずばあすは雪こそ降なまし消ずは有とも花と見ましや（\*雪

こそ―雪とぞ）

花と見ましや花とは見まじきといふ心。

てや・にや・をや・もや 子細なし。

やは

桜花はるくはゝれる年だにも人のこゝろにあかれやはせぬ（34ウ）

常よりもどけかるべき春なれば光に人のあはざらめやは

人の心にあかれぬかはあかれよと下知したる、光りに人のあわざらめ

やはひかりにあふべきとぞ。

たへてやは思ひありともいかゞせん葎の宿の秋の夕ぐれ

たへてやと云心。（35才）

世やはうき秋やは過るすまのせきうら風こゆる袖のしら波

はの字心なし。世やうき、秋や過る心。（\*過る心―過るの心也）

秋の田のほのうへてらすいなづまの光りのまにも我や忘るゝ

わすれはせずとかへる。（\*わすれはせずとかへる―是は我やはわす

るゝの心也。我やわするゝ、わすれはせずとかへしてきくべし）

〔網〕、「結句の末にやとをくこと初学の人たやすくよみえがたかるべ

し」とあり）

夢かさは野べの千草種の面影はほのく見ゆる薄ばかりや（35ウ）

よ

よは大躰かに同じ。又ぞに同じ。又下知の心有。（\*かに―やの字か

の字に）

皆人は花の衣になりぬなり昔の袂よかはきだにせよ

上のよはさしあてゝ云。結句よは下知也。

やよ山て山郭公ことづてん我世の中に住わびぬとよ（\*やよ山て

―やよやまで）

住わびぬるよと歎息して云。（36才）

忘るなよなよといひにし呉竹のふしをかきなる数こそ有ける（\*数

こそ―数にぞ）

けり

けりは結語の辞也。強き也。

世の中はかくこそ有けれ吹風のめに見ぬ人も恋しかりけり

けりけれのあつかひを弁べし。かくこそ有ければ詞をいゝ切らず、優

なり。心は世の（36ウ）中は如此の習も有けれといふ心。さて吹風のめ

にさだかに見ぬ人は恋かるまじきに扱も恋しかりけりと強くいひなり

（\*いひなり―いひすてたり）。

影やどす露のよすがに秋暮て月ぞ住けるをのゝしのわら

かゝる所には月もすむまじきにさても月ぞ住けるよといへる心。

榊葉のかをかぐはしみとめくれれば（37才）八十氏人もまどひせりけ

る

まとのしける。（\*まとのしける―これはまどるしける也）

けん

よひくゝに枕さだめんかたもなしいかねし夜か夢に見へけむ

たゝちねはかゝれとてしもうば玉の我黒髪はなでずや有けん（\*

たゝちね―たらちね）

此けん既往の心有。（37ウ）

梓弓ひきのゝつゞら末終にわが思ふ人にことのしげけむ

うき世をばけふかあすかと待かひの涙の瀧といづれたりけん（\*た

りけん―たかけん）

けんは、しげき、たかきの詞也。（\*しげき、たかきの詞也―しげき、

たかきの詞をしげけむ、たかけんといへる也）

き

きはけりに同じ。ケクノカヘシキ。至て。ありきあらず（\*ケクノ―ケ

リノ \*至て―至て軽し \*ありきあらず―ありきあらず、おもひきや

などいへるもけり也(38才)

うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふ物はたのみ初てき  
そめてけりなり。

なり

上は結ぶ辞。けりはさしつめて優ならず。也は平にすらりとむる。又するがなるなどは在の字也。ニアノ反ナ也。心はするがにあると云。(＊上は―上を ＊すらり―すらりと)

也けり(38ウ)

なりけりはことをいひつめてあく迄強き辞也。うつゝにも夢にも人にあはぬなりけりなど也。

まだちらぬ桜なりけりみよしのゝよし野ゝ山の峯のしら雲

惜からでかなしき物は身なりけりうき世そむかかんかたをしらねば

ふみ初る恋路のすへに有ものは(39才)人の心の岩木なりけり

源氏にうら波をとちかくきこへて又なくあはれなるものはかゝる所の秋也けりなど也(＊秋なりけりなど也―秋なりけりといへる詞づかひおもしろき也)。

なん

なんは、也なるをなんとはねたる有。又下知の心有はなといふをなんとはねたる也。(＊はねたる有―はねたる有。けりけるをけんとはぬる類也。 ＊なといふをなんとはねたる也―なといふをなんとはねたる也。是もてといふをてんとはぬるがごとし)

やかずともくさはもへなん春日野をたゝ春の日にまかせたくなん

(＊たくなん―たらなん)(39ウ)

上のなんはくさはもゆ也。結句のなんはまかせたれなど下知したる也。ちらばらなんもちらばれなの心、又花の散なんなど花のちらんといふ義に。常にもがもなは心なし。又とゑかゝな、はかなしやのや、さして心なし。(＊義に―義なり ＊常にもがもなは―常にもがもなの字は ＊とゑかゝな、はかなしやのや、さして心なし―とへかきな、

はかなしやなどいふなの字、やの字もさして心なし。至て軽し)

人ごとのたのみがたさは難波なる声のうらばのうらみつべしな  
(40才)

なの字心なし。伊勢物語に是なん都鳥といふ、古今にかくさだりにな

んやどりはあると云も、かくなんのなん一向心なし。惣て是らは古より声ありて義あらざる字也。自然と詞がら優にも聞てよし。(＊かくなんの―かくのごときの)

めり

めりはなりに少し疑の心。めれはめるはなれなるなどに同じ。但疑の心有。(＊少し疑の心―少し疑の心をかねたるやうの事なりと不味真院殿御説也 ＊めれは―めれ)(40ウ)

立田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦中やたへなん

あすからは若菜つまんと片岡のあしたの原はけふぞやくめる

夕附夜おぼつかなきを玉くしげふたみのうらは明てこそみめ  
右めりめるはなりなるにかといふ程の疑の心をかねたる也。めれなれも准へて知るべし。(41才)明てこそみめは明て見るめれ也。めはめれの略也。メレノ反メ也。(＊明て見るめれ也―明てこそ見るめれ也)

たり

たりたるたれはなりなるなれよりは少し急なるかたなるべし。見在の辞也。

ふるさとは春めきにけりみよし野のみかきがはらは霞こめたり

せり(41ウ)

せりせるはたりたるに大駭同じ。

こののはむむもとみけりさき草のみつばよつばに殿作せり  
せんは将来の心有。

わたつ海の濱の真砂をかぞへつゝ君が千とせの有数にせん  
するすれなどに准へて知るべし。(＊などに―など)

らん(42才)

らんは全く疑也。故にらんと留るは上に疑の詞にてもてにはにても有るべし。疑の詞はいづれ、たれ、など、さぞ、疑也。(\*さぞ、疑也。—さぞ等也。疑のてには、かの字やの字也。)

くるとあくどめかれぬ物を梅花いつの人まにうつろひぬらん

春立いふばかりにやみよし野の山も霞て今朝は見ゆらむ(\*春立いふ—春たつといふ)

此類常法也。(42ウ)

久堅のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらん

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲るさかなる花のみゆらん

(\*さかなる—さかざる)

右等疑詞はなけれども上の句に意の疑有。(疑詞はなけれども—疑の詞にはもあらざれども \*意の疑有—疑の意をふくめり)

我宿にさける藤波立かへり過がてにのみ人のみゆらん

秋萩にうらびれをれば足引の(43オ) 山下とよみ鹿のなく覽

是等は疑の心なけれども上よりそらくと讀下してらんと留る也。近

代此詠格なき歟。(\*そらく—すらく)

春日野にわかなつみつゝ万代をいはふ心は神ぞしるらん

みちとをみ入野の原のつぼすみれ春のかたみにつみて帰らん

神ぞしるらんとつめてらんはねたる也。(\*らんはねたる也—らんと

はねたる也)(43ウ)

思はんは思、みんは見、ねんは寝、せんは為の詞をはねたる也。

らし

らしはらんに大躰同じ。らんは十分の疑也。らしは七八分の疑也。

春過て夏ぎにけらし白妙の衣ほすてふあまのかぐ山

立田川もみじ葉ながる神なびの(44オ) 三室の山に時雨ふるらん

(\*ふるらん—ふるらし)

右等は大かたに疑たる也。らんは強く疑故に読方上に疑の字を置有べし。らしは疑の字なくて留る也。(\*疑の字を置有べし—疑の字あるべ

し)

天の河うきつの浪に彦星の妻むかへ舟今やこぐらし(「らし」は「らん」の「ん」を見せ消チにして訂正)

疑の字置てらしと云々。(疑の字置てらしと云々—疑の字あるもらしと留たる歌も有。一首の吟によるべし。「網」、この文、「天の河」の歌の前にあり)

べし(44ウ)

べしは斯有べしと治定して云も有。又斯あらふと推量て云も有。べきべくべらべみ等少々違ふ也。

奥山のいはがきもみぢちりぬべし照日の光りみる時なくて

佐ほ山のは、そのもみぢ散ぬべみよるさへみよとてらす月影

見る時なくてちりぬべしと云。ちりぬべみと(45オ)休ていひ下す也。

(\*ちりぬべしと云。—散ぬべしとかへして聞べし。 \*休ていひ下す

也。—詞を休めてよるさへ見よとてらす月かげといひながしたるなり。

これはべしといふよりも一段うかゝひていふなり。)

我宿の花見がてらにくる人はちりなん後ぞこひしかるべき

散なん後ぞ必ず恋しかるべき事ぞときはめて云。

夕ぐれのまがきは山とみへなむよるはこへじと宿りとるべく

宿りとるべくにて心をのこせり。とるかたらぬか(45ウ)治定しがた

し。大かたとるべくにや(\*べくにや—べくの心也)。

秋の夜の月の光りしあか見ればくらぶの山もこへぬべら也(\*あか

見れば—あかければ)

べき也の心也。くらぶの山もこへられふものじやと云也。當時べらな

り詠べからず。

まし

ましはべしと大躰同じ。下知の心あり。

おもひかね打ぬる宵も有なまし(46オ) 吹だにすさめ庭の松かせ

秋の野に道もまどひぬ松虫の聲する方に宿やからまし

ぬべし、宿やかるべしの心。

みる人もなき山里のさくら花外のちりなん後ぞ咲まし  
咲よかしと下知して云。

花見むとうへけん人もなき宿の(46ウ)桜はこそ春ぞさかまし  
去年春咲ましものを咲ざりしと云。

かし

かしは治定の心有。又下知の詞の下にも有べし。とへかしなどいへり。  
べし、ましよりも強する心あり。(＊強する―強く決する)

いはぬ間はまだしらじかしかぎりなくわが思ふべき人はわれとも  
(47オ)

さてももしわすれけりかし鶯のなく折のみやおもひいづべき(＊も  
し―きみ)

まだしらじ、わすれけりにて理はきこへ侍るを、かしと云にて事を決  
する。

ぬる

ぬるぬれはけるけれよりは軽く、又ぬと云はぬるの略也。ヌルノ反ヌ  
也。(＊軽く―軽く緩也)

心をぞわりなき物と思ひぬる(47ウ)見るものからや恋しかるべき  
今更に思ひいでじとしのぶるを恋しきこそ忘れわびぬれ

梓弓をして春雨けふふりぬあすさへふらば若菜摘てん

秋はきぬ紅葉は宿に散敷ぬ道ふみわけて問人はなし

秋はきぬ露は袂にをき初めぬ(48オ)木の間の月のもらぬ夜ぞなき

松もひきわかなもつまず成ぬるをいつしか桜はやも咲なん

松も引ずわかなもつまずの心。(＊つまずの心―つまずの心也。これ

を兩句貫通の字といふ也)

つる

つるつればぬるぬれよりは重く強く既往の心あり。つと云もつるの略  
也。ツルノ反ツ也。

今こむといひし斗の長月の(48ウ)有明の月を待いでつる哉

道野へのしみづながる、柳影しばしとて社立とまりつれ

うつせみはからを見つゝもなぐさめつ深草の山の煙だにたて(＊山  
の―山)

待ける哉にて幾夜もくゝの心。つると云にて既往の心ある故也。立と

まりつれの字に力有。心はしばしとて社の思ひしに(49オ)時をうつし

たる心あり。句末にてと有はぬに同じか。(＊待ける哉―まちいでつる

哉 ＊幾夜もくゝの心。―幾夜もくゝの心ありとぞ。 ＊句末にてと有

はぬに同じか。―又と留るもつる字に大体おなじといへども、詞の趣

によりて聊軽重有べし。)

つゝ

春霞たてるやいづこみよし野、よし野、山の雪はふりつゝ、

三吉野、山かきくもり降(る)雪はふもとの里は打しぐれつゝ、

〔降(る)雪は〕は、原文の「雪降は」の「降」の上に付した返り

点で読みを指示。「網」には「雪降(れ)ば」とあり)

ふりつゝ、しぐれつゝ、心。(＊しぐれつゝ、―打しぐれつゝ、

くゝの心にてとも中断もなき心也)(49ウ)

山桜我が見にくれば春霞峯にも尾にも立かへしつゝ、(＊立かへし

つゝ―立かくしつゝ)

あら玉のとしのおほりに成ごとに雪もわがみもふりまさりつゝ、

上に物ふたつをみて留。雪も降増りつ我身もふりまさりつ也。(＊み

て―云てつゝと)

夏衣きて幾日にか成ぬらん残れる花はけふもちりつゝ、(50オ)

水鳥を水のうへとやよ所に見ん我もうきたる世をすぐしつゝ、

二首共に程を経たる心。

うき人の月はなにぞのゆかりぞと思ひながらも打ながみつゝ、(＊な

がみ―ながめ)

かよひこし屋どの道芝かれぐゝにあとなき霜のむすぼゝれつゝ、

打ながめつゝ、むすぼゝれつゝ也。(\*打ながめつゝ、むすぼゝれつゝ也。―打ながめつゝ、むすぼゝれつゝ、ともに感情有て言外の意味かぎりなきもの也。)(50ウ)

恋しねとするわざならしむば玉のよるはすがらに夢に見よつゝ

(\*見よ―見え)

あならめに常なるべくも見へぬ哉こひしかるべき香は匂ひつゝ

(\*あならめ―あなうめ)

こひしねとするわざなるかと云心、都てうへに断る詞有ればかへして見るべし。(\*こひしねとするわざなるかと云心―よるはすがらに夢にみえつゝこひしねとするわざなるかといふ心也)

哉

かなと留るは言語道断の所に有るべし。(51オ) 詞にていひつくして猶其上に歎ずるに哉と云。(\*其上に―其上を)

風をいたみ岩うつ波のをのれのみくだけてものを思ふころ哉

物おもふころの有様哉と云。(\*有様哉と云―あり様かなと云也。重き哉留也)

君がためおしからざりし命さへながくも哉と思ひける哉

心かへるべし。心は一度逢みつれば命も今更(51ウ)おしくながくとおもひける也。かくは思はざる事ぞと心かへる也。けるといふにて心かへる哉になる也。少疑ひの心有。上にかた有故(\*上にかた有故―心は上にかとがめてなと定むる也)。

うき人の面影そへて頼むには来ぬ夜もひとり月を見る哉

久かたのつきゆへにやは恋初しながむればまづぬるゝ袖かな

當然哉也。(52オ)

今こむといひし斗の長月も有明の月を待出つる哉 (\*長月も―長

月の)

つる哉は既往の心有。人をこそ待しに有明の月を待たるやう也と恨たる心有。つると云にてほど経心あり。

秋の夜の有明の月の入までに休らひかねてかへりにし哉かへりにしかたと云にて少し既往の心有。(52ウ)

やすらはでねなまし物を小夜更てかたぶくまでの月を見し哉

宵からかたぶく迄月をみしの心、かへして見るべし。ける哉ぬる哉つる哉にし哉、けるぬるつるににして、既往の心にも見在の心にも又かへる心にも成。(\*かへして見るべし。―但此歌は上へかへして聞べし。かたぶくまでの月をみし哉、宵よりねなましものをねずしてといふ心を餘情にいへり。)

虚字よりうつりて哉と留る、むつかしゝ。野べ哉たつ霞哉など実字より哉と留るはやすかるべし。(53オ)

なげゝとて月やは物を思はするかちがほなるわが涙哉

大躰上へ帰る也。こころは月故に物思ふとなげきしか、能々思案すれば月やは物を思はする、月は思せぬぞ、唯なげきは我身からとて思ひ知りたる也。(\*我身からとて―我身からの事と)

定めなき時雨の雲のたへ間哉さてや紅葉の薄くこからむ (53ウ)

もろともになるとはなとに打とけてみへにける哉朝がほの花(\*な

るとは―おるとは \*なとに―なしに)

唯かなと云てかと云に同じ。

我もわれ人も人なる世なれどもわれもなき哉人もなきかな

軽き哉。源氏物語に若紫にこゝにもものし給ふはたれにか、たづねまほしき夢を見給へし哉哉といへるも、見給へしかと云也。(54オ) 疑の問心。(\*見給へし哉哉―見給へし哉 \*疑の問心―うたがひ問心なり)

こぬかなとしばしは人におもはせんあはで帰りしよるのねたさに

こぬかとの心也。初より四句迄の哉かるき方なるべし。此外、も哉、てし哉は願ふ心にて哉の例にあらず。(\*初より―初五より \*かるき方―やすきかた)

秋ならで妻とふ鹿を聞き哉おりから聲の身にはしむ哉 (\*しむ哉

―しむかと) (54ウ)

願ふ心也。(＊願ふ心也—此歌のきゝし哉はきゝてし哉と願ふ也。哉にあらず)

〔網〕、「てには用意の事」とあり。「天」は脱漏。

一 てには文章の助字也。然るに助字は字義を以分弁し、てにはは詞につきて其義を覚悟する。依而同じてにはも毎首其心違ふ事有るべし。古歌見あきらめんが肝要成べし。(＊肝要—てにはの肝要)

一 唯、猶、などゝ、いとゝは詞なるてには、書出せり。かたはらいたき事(＊などゝ—など)。(55オ)〔網〕には、「近代てにはの諸注に魂を入るてにはとて、たゞ、猶、さへ、だに、など、いとゝ等を出せり。この説いかゞ。さへ、だにはてにはにて、唯、猶、など、いとゝは詞なるを、相混じて抄出せる、その理なきに似たり。かゝる杜撰なる書を秘伝などいふ事かたはらいたき事也」とあり。

〔網〕、「一 同注にみゆと留るは五音第三の音にてかゝゆるなどいふ説有。私云、此義にかざるべからず。何とみゆ、何にみゆといひても義理たがふべからざるなり。」とあり。「天」は脱漏。

山里の家路は霞こめたれど植ねの柳すへことに見ゆ

雪つもるこしの山風吹ぬらしひはら松のはあらはれてみゆ(＊みゆ

—「みん」の「ん」の上に朱筆で「ゆ」と訂正)

断り正しきを以肝要とす。(＊断り正しきを以肝要とす—かやうにもよめる也。此類にてみゆと留る事あげてかぞふべからず。所詮ことほり正しく聞ゆるを以てにはの肝要とす。必格とすべき事はあらざるべし)〔網〕、「一 詞もてにはもつゝかざして意を以てつゞく事有。たとへば、」とあり。「天」は脱漏。

こよひこむ人にはあはじ七夕の久しき程に待も社すれ

七夕といふて第四句へはつゞかず。されども(55ウ)意を以つゞく也。

思ひいずる常盤の山の岩つゝじいはねば社あれ恋しき物を

第四句より結句へ意を以つゞく也。此外心にて切有。詞にて切有り。てにはにて切あり。

〔網〕、「一 てにはを詞に用たる歌有」とあり。「天」は脱漏。

今朝はしもおきけんかたもしらざりつおもひ出るぞ消てかなしき  
(56オ)

しものてにはを霜に用ひたり。

一 てにはの義数品ある様なれども所詮は切と讀と也。文章に句読あるがごとし。句読を弁ふれば其理能明らか也。歌のてにはの切讀との二つにて一首の道理は詞べし。(＊切と讀—切と讀〔天〕は「讀く」の「く」に見せ消す) ＊歌の—歌も ＊切讀との—切と讀との ＊詞べし—調べし)

一 或説にてにはは鳥の翅のごとし。舟の楫のごとしと云々。鳥は翅を以て高天え(56ウ)登り舟はかぢを以て海路を凌ぐ。てにはを以哥は千變万化する也。

一 てには多き歌は長高く聞る物から、あまりにあるのはのび過てよはく聞ゆる事の有るべし。又てには少きは長みじかくつまりてきこゆ。能々長短緩急を考てあつかふべし。(＊あまりに—あまりに数多)

一 歌は詠吟の物なればよみあげなど(57オ)するに何となく吟をうるはしく聞るやうにと心懸べし。吟をうるはしくせんは詞の讀がらによるべし。詞のつゞけがらにはに有るべし。唯一字も大切の事也。古へより秀逸たるはその扱ひ妙なるもの有。深く味ふべし。(＊讀がら—讀がら) (57ウ)

六郷鼎次郎筆

(平成二十年十月六日受理)

**A Reprinted Text of “TENIWA TSUNAHIKI” (天仁波綱引)  
by Teijirō ROKUGŌ (六郷鼎次郎)**

**SATO Nobuo**

In this paper, I will reprint “TENIWA TSUNAHIKI” by Teijirō ROKUGŌ.

“TENIWA TSUNAHIKI” is an extract of “TENIWA ABIKIZUNA” (てには綱引綱) by Michitoshi TOGANOI (梅井道敏) in the middle Edo period.

“TENIWA TSUNAHIKI” is an interesting text, because it enables us to understand some influences of “TENIWA ABIKIZUNA” on the later generations.